



対談出演者、左から柳瀬純子さん、林花子さん、貴名歩子さん、下岡純子さん、韓静さん

を知らないで、年後、精神を病んで亡くなった。その姿を父は見ている。私は夜間中学で作文を書くことになり、父の生い立ちを初めて聞いた。父は12歳から毎日2時に起きて家のことをし、家族の食事を作り、苦勞してきたと思う。私の帰国よりあとの96年、60歳を過ぎて父と母、弟の3人は国費で日本に帰って来た。しかし仕事はできない、日本語もわからない、外に出ることも出来なかった。その時、私の勤めている会社の人が「あなたたちいいわね。帰ってきたら私たちの税金で食べて何もしないで」と言われた。その時私は腹が立った。もし中国に行かなかったら、日本で働いて、自分で年金を払って、今は年金生活ができています。日本人はこのようにことが理解できないのか。私も辛い。外では中国人、中国人と言われ、中国にいた時は日本人、日本人といわれていた。本当に辛かったと思う。父はいま87歳。最近では認知症になり、外に出ることも出来ないし、家で入退院の生活で、母は車いすの

は夫を亡くして途方に暮れ、「3人の子供の命を守りなさい」の夫の遺言もあり、長男と三男を養子として預けた。敗戦の混乱の中3人の子供を日本に連れて帰ることは難しかったのだ。父はとても優しい養父母に恵まれて大切に育てられ、大学まで行けた。父は中国人として育てられた。しかし、帰国してからは体調も悪く、心臓病も発症したので働くことが出来ず、生活保護を受けざるをえなかった。帰国した時は57歳でしたが、勉強が好きで、一生懸命勉強して病院や区役所に行く時には通訳なしで行けた。とても良い父です。

林・私の祖母は22年1月生まれで、日本女子商業高校を卒業して銀行で5年間働いた。祖母の元夫は宮城県から青少年

年義勇軍として黒龍江省嫩江に行き、3年後の44年、義勇隊柏根里開拓団として嫩江の北に入植した。その年、元夫はお嫁さんを連れに日本に戻り、祖母は「大陸の花嫁」として敗戦の1年前に満洲に渡った。そしてすぐに妊娠して年に赤ちゃんが生まれて。その2カ月後、元夫に召集令状が来て関東軍に入った。敗戦後、祖母は赤ちゃんを連れて收容所に入ったが、收容所に食べるものはなく、赤ちゃんは餓死した。女性と子供ばかりの收容所だったの



田中いずみさん、時帰国した時は、宮城県気仙沼市の開拓団の招きだった。元夫は会ってくれなかった。その時祖母は「赤ちゃんが收容所で

亡くなった。ごめんさい」と謝りたかった。元夫の弟と妹が会いに来てくれて「お姉ちゃんよく生きていたね。良かった」と抱きしめてくれた。この場で、祖母の人生を話せることは幸せです。

柳瀬・2世の私から見て母の人生は想像できません。神戸地裁の中国残留孤児国家賠償請求訴訟の時、弁護士さんから資料が送られてきて、私が翻訳しなければならなかった。その時に母から何歳の時にどんなことがあったかを聞き、母の生い立ちやなぜ残されたのかを初めて知りました。そんな人生なのに母は明るかった。私から見ても強い人だと思える。私だったらあの戦争の中で生きていたら、あんなに明るくはなれないだろう。私は母が尊敬できます。

貴名・私の祖母は22年1月生まれで、日本女子商業高校を卒業して銀行で5年間働いた。祖母の元夫は宮城県から青少年

韓・支援相談員として尼崎で働いています。医療機関に同行した時、「中国残留孤児の方ですよ」と紹介するのですが、最近の若い医療機関の方たちは、お医者さんや看護師さんは「なんで、どういこと」と



対談・親たちの人生を語る

辛。父は入院中に、お酒を飲んで同室の患者に殴られ、怪我をした。院長に説明を求めに行ったら、ドア越しに「中国に帰れ！」と院長に怒鳴られ、ものすごく辛かった。そういう時に助けてくれたのは日本の方だった。

下岡・日本に来て困ったのは言葉。一番辛かったのは、娘が中学で不登校になり学校を辞めたこと。娘の先生から手紙を貰ったが、日本語がわからなかった。学校に行かなくても良いと書いてあったが、なぜそれで良いのかわからない。娘はいじめの事を何も言ってくれなかった。娘は一時中国に行つて、また戻ってきた。中学は卒業したが、高校で不登校になり、通信高校を経て、最終的に京都外国語

日本語が全く分からなかった。言葉が一番の壁だった。定着促進センターで4カ月間日本語の勉強をした。日本の習慣、これから使う日本語を中心に勉強した。「月給ですか?」「日給ですか?」「いくらですか?」「ボーナスはありますか?」これが最初に覚えた言葉だった。結婚して子供が生まれた。子供の教育はこの家庭でも難しい。私たちの場合、子供は学校で日本語を習い、中国語が分からないので、親は日本語で返してあげないといけない。子供から聞かれても、日本の生活についてアドバイスができない。そういうこともあるのかと聞いただけで、子どももあまり相談してこない。大きくなるとさらに難しく

韓・親の人生について若い私に言えるのかと思う。ある日、中国残留孤児のテレビニュースを見ていた母が「身元のわかっていない人はうらやましいね。いまだに自分の親がわからない」と言っていた。それを聞いて私も衝撃を受けた。これまで親のこと、人生について真剣に考えたことがなかった。親がこんな悔しい思いをするのはなぜだろう。戦争がなかったら母には別の人生が有っただろう。母がいなかったら私はここにいない、そう思うと今の母が私の母でいてくれて良かったと思う。

③ 日本に来てからのこと  
韓・愛知県にある定住促進センターで4カ月間過ごした。一番驚いたのが部屋の狭さだった。8畳に4人、2段ベッドが珍しかった。定住した伊丹の県営住宅は41㎡の2DKで、両親が6畳、私が4畳半。兄は2畳の物置のような部屋で、1年出て行った。若い私は日本語の習得が早く、アルバイトをしながら大学生になったが、母は言葉がでなかった。職場でいじめられて、まともな説明を受け

下岡・日本に来て困ったのは言葉。一番辛かったのは、娘が中学で不登校になり学校を辞めたこと。娘の先生から手紙を貰ったが、日本語がわからなかった。学校に行かなくても良いと書いてあったが、なぜそれで良いのかわからない。娘はいじめの事を何も言ってくれなかった。娘は一時中国に行つて、また戻ってきた。中学は卒業したが、高校で不登校になり、通信高校を経て、最終的に京都外国語

林・飛行機を降りた時、祖母と同じ開拓団の団員と先に帰国した叔父が迎えに来てくれた。そしてその叔父さんの家で泊まった。私が日本に来て一番印象に

残っているのはそのことだ。開拓団の人が紹介してくれたた石の加工会社の社長さんが身元保証人になってくれた。今日着いて、「明日絶対仕事来てよ」と言われた。父は、子供たちは中国で大学を卒業しているのだから日本語学校に入れたかった。でも、岐阜に学校はなかった。父の中国時代の友人が神戸に行き、父は神戸が気に入って引越すことにした。急に決めたので祖母は怒った。祖母は会社の社長の家に家族5人を連れて行き「兵庫県の日本語教室に勉強に行きます」と謝った。神戸にあった兵庫県福祉センターの日本語教室に通った。今でも神戸の父の友人に感謝している。ずっと岐阜にいたら、日本語の勉強はできず、今の私はないと思



下岡・父は本当に苦労した。父は44年に11歳で中国に行き、1年半後の8月に開拓団が解散し避難生活が始まった。10月に祖母が餓死、12月に祖父が凍死した。父の兄は日本の敗戦